

特集 インドの建築世界

2002年日本建築学会賞

ル・コルビュジエのインド

ル・コルビュジエは、インドの自然や暮らしと、古典建築から様々なことを学び、チャンディガルの新都市計画と10の建築をインドに植した。写真中央は代表作のひとつ、チャンディガル州議事堂で、入口正面のポルテコとハイバポリック曲線(黒斗状)の講壇塔である。巨大な入口ドアのエナメル画は、太陽の運行と、インドの大樹の周りに集まる様々な動物を象徴化して描き、人と生命・自然や宇宙との関係、成長と調和を神秘的表現にして、インドのプロジェクトの思いを語っている。このダイアグラムが透かされた扉を通り抜けると、ハイサイドライトから神秘的な光が照らされる多柱室のホワイエに入り、講壇塔の基礎部分を時計回りに回って、太陽や月の光が劇的に貫通する講壇内に入る。表紙はこの創造の背景・関係を探ることによって、インド建築の紹介を始めている。

ル・コルビュジエは、アフマダーバード近郊のステップウエルを訪れたときに、大地の上に水と、太陽と月の天体の動きと建築との間にダイナミックな関係を見る。途中で火力発電所のクーリングタワーに出会ってハイバポリック柱の形の彫像に魅せられる。インド・イスラム建築のチャトリーからル・コルビュジエの多彩なパタールの概念が展開する。インドの動物や樹木、人々の暮らしからも様々なことを学んでいる。さらにアリーの抽象的な天体観測儀ジャンタルマンタル、民衆の入口空間やポーチなど、インドの形造的、空間的概念の影響を伺うことができる。現象世界を超えて究極の真理に導くことを表すヒンドゥー寺院、天と大地を結ぶヒンドゥーや仏教建築の存在に関心をもっていたとも考えられる。過去の権威に頼るのではなく、モダニズムを超越的に捉えるのではなく、人間と建築に対する普遍的課題を見逃さないためではないだろうか。

そして、タゴールの詩、ギーターンジャリからインド思想のエッセンスのひとつもいえる詩を引用する。個の宇宙と大いなる宇宙、有限なる生命との一体感の結びがリズムカルにうたわれている。

(次頁・新建築)



チャンディガルの議事堂(1957年・1961年と1962年)

写真
Veda-Shikha Foundation
(火力発電所、鋼の柱)
北田英治(享年)
新建築社(上図以外)



アフマダーバード近郊の村



ヒンドゥー教の儀式の様子



アフマダーバード近郊の村



ニューデリーのジャンタルマンタル(天文台)



チャンディガルの議事堂(1957年・1961年と1962年)



タゴール



ヒンドゥー教の儀式の様子



太陽の動きと生命を神秘的ダイアグラムで表現した入口の壁画

私の血脈を流さなくばとなく流れている。この同じ生命の流れが、世界中に流れたら、リズムにあわせて解つている。この同じ生命が喜びとなつてはとぼしり、大地の塵埃の中を駆けめぐって無数の草の葉に達し、ほげしい浪となつて木の葉や花に入りこむ。この同じ生命が生と死の太平洋の揺蕩の中で、濱のみちひまひまにつれて揺りまわつていられる。この生命の世界に魅かれて、私の手足が空気に舞くのを感ずる。そしてこの刹那に多くの世代の生命の鼓動が私の血脈の中に解つていることを私は誇りとする。

© 1998 by the author. All rights reserved. (新建築社刊)